(翻　訳)

私の生涯から
(1947年執筆)

フーゴー・シュトライザント　述
杉　本　俊　朗　訳

今日では、齢70に達したからといって、特別その人間が興味溢るる人物でなければならないというわけでもあるまい。彼が経てきた時間そのものが、途方もない出来事や変化にみちていて、ただそこで生きてきたというそのことだけで、いやでも歴史の青錆びのようなものが身についてしまうものなのだ。しかもその錆びたるや、いまの世の中ではそれほど威厳のあるものではないのであるから。世紀の変わり目だったら、若い男性は鼻眼鏡をかけ、口髭をたくわえ、細いズボンと堅いハイカラーを身につけ、帽子なしで表を歩こうなどとは思いもつかず、夏場ならカンカン帽、冬なら山高帽と相場は決まっていたものだが、映画がちょいちょい見せてくれる当時の出で立ちひとつとっても、そのようなものはおよそ今日、ショート・パンツとジャンパー姿の若者たちにとっては吹き出したくなるような、博物館行きの代物にみえるのではないだろうか。だが当時、私たちは、服装だけでなく、われらが世界の全般を律している原則や生活条件の正当性、恒常性、その端正さを、心底信じていたのだった。たしかに私たちは、マルクスやシュティルナーを読み、社会主義について論じ合い、「自由劇場」で演劇を見、あらゆる時代の青年同様、世界は改善を必要とし、また世界改良の機は熟していると考えていたが、しかし心の奥底では、われわれのブルジョア社会の安定不変と永劫不易を信じて疑わなかった。それにまた本当のところ私たちは、政治にそれほど関心をもっていたわけではなかったのだ。私たちにとって、物事すべてがいつもきちんと決められていて、それが見事な歩みをみせていたのである。ド

イツ人は万人が認めざるをえない、世界のなかの一強国であり、ドイツ人は、世界市民となる途上にあって、「全ドイツ連盟」[1]の面々がどんな国粋的台詞をがなり立てようとも、それを真面目に受け取るには及ばなかったのである。すなわち、人類は日一日と完全に向けて歩を進めていたのだった。神ー悩みー戦争ー貧困、これらはすべていわば先祖返りのぶり返しにすぎず、そのようなものは、われわれ小セテムブリーニ[2]が、徐々に改善策を講じて除去しうるはずのものであった。こうしていまだ揺らぐことなき進歩の確信のなかで、おそらく私たちは当時幸福であったのだろう。だからといって、今日、若者のなかに、彼らが置かれている不安な状況についての彼ら自身の意識と苦しみを、あの頃の手放しの自信と交換したいと思うものがはたしているであろうかどうか。もっとも、このようなことは、あるずっと偉い70歳の男の言うように、「そう簡単に決着はつかない問題」ではあろうが。

私にとっては職業選択の問題はなにもなかった。私の曽祖父は教師だったし、私の祖父は「司書」で、早逝した父は本屋だった。書物への嗜好は純粋に血統上かくも絶対的だったので、――学問的な職業は私の経済状態によって許されなかったから――書籍商だけが私には問題となった。私は徒弟時代はいまはもうないウンター・デン・リンデンの書籍商カルヴァリで過ごした。そこのお客のうちで私の記憶に残っているのは、とりわけ、マチルデ・ヴェーゼンドンクで[3]、彼女は近所に住んでいて、いつも数頭立て馬車を乗りまわしていた。この上なく上品な貴婦人らしい姿で、これがヴァグナーに心酔していた若者たちに深い印象を与えた。

1）Alldeutscher Verband　1891年から1939年まで存在した極右の好戦的宣伝組織で、財界や知識層や都市小市民を会員として大艦隊建設を支援し，ファシズムへの途を開き，ナチス支配後に使命を達して解散。

2）Settembrini, Luigi(1813-1877) イタリアの政治家，愛国者，文学史家。ブルボン家の支配に反対し，1841年に秘密結社「イタリア統一大協会」を結成，終身刑を宣告さる。1859年にイギリスへ逃亡，帰国後ボロニヤ大学，1862年にナポリ大学教授。シュトライザントは自分の世代を進歩主義者セテムブリーニに擬しているようだ。トーマス・マンの『魔の山』にルイジの孫ロドリコが登場する。

3）Wesendonk, Mathilde(1828-1902) ドイツの女流詩人，リヒャルト・ヴァーグナーの親友で，彼の芸術に大きな影響を与えた。

ヴァルター・ラーテナウ[4]とヨーゼフ・カインツ[5]もよくやってきた。ラーテナウについては名前のほかは、残念ながら私の記憶はほとんど残っていない。もっと私の興味をひいたのはヨーゼフ・カインツで、やせぎすの男前、たいへん真面目で、いつも低い声で話し、ほとんどいつでも友人の、のちに伝記作者となったミヒャエーリスといっしょに現れ、なによりもフランスの挿絵画家の本を求めた。

1901年に24歳の私は、独立した本屋としての第一歩を試みた。マルクトプラッツの雑踏を意気揚々と見棄てて、私はまずティーアガルテン駅近くのある建物に居を定めた。しかし客は私の引込みすぎをいささか御世辞たっぷり尊重してくれたのに、私は生活して行かねばならなかったので、私は人目につきやすいように、ヨアヒムスタール街にほど遠からぬアウグスブルク街にまともな書店を開いた。そこは当時としては近代的な家屋のある新興の高級な地区で、「紳士淑女専用階段」、「使用人配達人専用階段」付、一部には水洗設備がついていて、特別に贅沢ないくつかにはエレヴェーターと集中暖房さえついていた土地柄だった。カイザー・ヴィルヘルム記念教会はこの地区の象徴で、ちょうど落成したばっかりだったし、タウエンツイーン街はのちに繁華街となるが、まだやっと開通したばっかりだったし、クーアフュルステンダムに沿ってつぎつぎと立派な建物が生まれたが、裏通りの大部分はまだ空地だった。カイザーアレーは手の入っていない荒地で、その入口にはいまはヴィルメルスドルフ区役所になっているヨアヒムスタール・ギムナジウムが立っているだけだった。私の書店は当時はこの広い周辺では唯一のもので、動物園の向いのいまのブタペスト街に雑誌店が1軒、カント街には教科書店が1軒あっただけだった。

私のはじめのお客のうちには、「カフェ・デス・ヴェステン[6]〔西区カフェ〕――「カフェ・グレーセンヴァーン〔誇大妄想狂カフェ〕」

4）Rathenau, Walther(1867-1922) ドイツの実業家，政治家，AEG社長，第一次世界大戦後に外相，戦後再建に尽力，暗殺さる。

5）Kainz, Josef(1858-1910) オーストリアの俳優，ベルリン，ヴィーンで活動。

6）第一次世界大戦前から1920年代初めまで，ベルリン市西部のクーアフュルステンダムとヨアヒムスタール街の交叉する角にあったカフェ。ボヘミアンの文士や芸術家の溜り場で新聞や雑誌が多数備えられ，名物男の新聞係の給仕リヒャルトは常連の勘定の面倒を見て，金貸しもやっていた。

という名前でもっともよく通っていた——の常連がいた。この仲間からたびたびエーリヒ・ミューザーム[7]、エミール・オルリック[8]、ローダ・ローダ[9]それから画家トリーア[10]が私のところへやってきた。有名な「新聞係給仕人リヒャルト」はサイン入りの本を持ち込んできたが、これは金に困っていたお客が支払いのために彼に渡したもので、そもそもこの仲間うちでは一部で私有財産と占有関係について特別な見方が支配していたわけだった。常連のあれやこれやが内々の問い合わせを私のところへ持ち込むことも稀ではなかった。「僕の本がたくさんなくなったけど、たぶんあんたのところへ･･･が安く売ったんじゃないか？」。『テーベの王子』の抒情詩人エルゼ・ラスカー＝シュラー[11]もよく訪れたが、彼女はオリエント風の傾向を自分の外見によっても強調していた。けれども彼女の日常の会話はやわらかい抒情的な声でなされる場合は少なかった。いつかなど彼女は自分のほしい本が手に入れられなかったときには、「あんたは大馬鹿さんね」と激しい言葉で扉をパタンと閉めて出て行った。私の本屋業のはじめのころ、私はいわば副業として、あるライプツィヒの出版社で発行されていた書誌『古典言語学目録』を編集した。私の本業のためにこの仕事に十分な時間をさくことができなくなったので、私は編集をやめざるをえなくなり、大学の掲示板に貼札をして、後継者として言語学専攻の一学生を見つけ、この学生を仕事に引き入れて、ついで彼がこれを引き受けてくれた。彼はハインリッヒ・ウーレンダール[12]といい、いま

7）Mühsam, Erich(1878-1934) ドイツのアナーキスト詩人，ナチス支配下にオラーニエンブルクの強制収容所で自殺。

8）Orlik, Emil(1870-1932) ベーメン生まれのドイツの銅版・石版画家，舞台書割，肖像画の作品多し。ジャポニズムの浮世絵に傾倒し，1900/1901，1911/1912の二度にわたり来日し，滞在の成果として版画集“Aus Japan“(1904)が生まれた。その複製版『日本便り』を1996年雄松堂出版が刊行。

9）Roda Roda, Alexander Friedrich Ladislaus, 本　名 Rosenfeld, Sander Friedrich(1872-1945) スロヴァキア生れのオーストリアの風刺作家，ジャーナリスト。

10）Trier, Walter(1890-1951)　プラーハ生れの新聞挿絵画家，風刺雑誌『ジンプリチシムス』の漫画家。

11）Lasker-Schüler,Else(1876-1945) ドイツの女流詩人，抒情詩のほか小説，戯曲の作品もある。西区カフェ全盛時代のボヘミアンの女王，ナチス支配後はエルサレムに亡命。

12）Uhlendahl, Heinrich(1886-1954)　ドイツの司書，1925年にドイツ図書館(Deutsche Bücherei)の副館長，1938年に館長。

ではライプツィヒのドイツ図書館の館長だ。当時の候補者のうちからまあまあ相当に有能な人を探しだすことができたことを本当はかなり自慢に思っている。

世紀の変り目の時代はドイツ愛書趣味の一種の春の目覚めだった。かなりの数の一流出版社、インゼル、ディーデリヒス、ランゲンはE・R・ヴァイス[13]、マルクス・ベーメル[14]、プレートリウス[15]、フォーゲラー＝ヴォルプスヴェーデ[16]のような芸術家の協力によって書物の外装を変えようと試み、また絵入りの表紙をもドイツへ弘めた。そのなかには一部に本物の芸術品があったので、私はひとときこういう表紙の特別展示会を催して成功を収めたが、かなりの数の観衆から「気狂いじみた極彩色もの」にたいしてたびたび怒りの叫びが挙げられた。

このころは美装本や稀覯本の愛好家や通の数は、文字通り十指を数えるくらいだった。そういう人々はフェドール・フォン・ツォーベルティッツ[17]、『文学年報』の創刊者ヨーゼフ・キュルシュナー[18]、グリゼバッハ兄弟[19]、ノイシュテティンのユダヤ人街火災訴訟や人身御供訴訟でのすばらしい弁論で有名になった法律顧問官ゼーロ、音楽研究家レーオポルト・ヒルシュベルク[20]、ゴットヒルフ・ヴァイスシュタイン、その他数人だった。初版本にたいする需要はそのころまではごくわずかだったので、私はコッタ社から1796－1800年のシラー

13) Weiss,Ernst R.(1884-1940) ドイツの小説作家。ナチス支配後は亡命して自殺。

14) Behmer, Markus(1879-1958) ドイツの線描画家，銅版師，ビアズリーの影響を受けた。

15) Preetorius, Emil(1883-1973) ドイツの挿絵画家，舞台装置家。

16) Vogeler-Worpswede,Heinrich(1872-1942) ドイツの版画家，室内装飾家，詩人、リルケの友人で協力者。

17) Zobeltitz, Fedor von(1857-1934) ドイツの騎兵将校，風俗歴史小説作家。

18) Kürschner, Joseph(1853-1902) ドイツの編集者，多くの参考図書を編集，『ドイツ国民文学』220巻，『ドイツ文学年報』が著名，『キュルシュナー学者年鑑』は現在も刊行中。

19) Grisebach, Eduard Anton Rudolf(1845-1906) 愛書家，文学史家，抒情詩人『ドイツ愛書家の図書』(1894-95)の著者。Grisebach, Hans Otto Friedrich Julius(1848-1904) 前者の弟。建築家，愛書家，芸術院会員，住居設計に集中し，ハウプトマンの自宅を設計，晩年蒐書に打ち込む。

20) Hirschberg, Leopold(1867-1929) ドイツの音楽理論家，医者，フンボルト大学音楽史講師。

編『文芸年鑑』(『風刺詩年鑑』を除く)の数年分の元版を昔の1ターラー8ノイグロシェン(3.80マルク)の「小売価格」で手に入れることができたし、同じようにゲーテの『仮想行列』、『芸術と古代』、『詩と真実』の初版本も入手できた。ゲッシェン社からは私はさらにメーリケ[21]の『イーリス』の初版本をものにしたし、ゲッチンゲンの出版社から1811年に出たローマン派の雑誌『ディ・ヴュンシェルルーテ』の残部を手に入れた。私にとってこの上なくうれしかったのは、1774年にライプツィヒで匿名で出た、著者はゲーテとレンツ[22]の『プラウトゥスによる喜劇』の出版者用の最後の1部だった。このころ西部国境の都市から約9万冊の出物が私に持ち込まれた。持主の小売店が新刊書のために場所が必要だったので譲りたいということだった。これは貸本文庫であって、古典派作家、ローマン派作家の初期の版本の信じられないくらい貴重な宝物をふくんでいた。L・アーヒム・フォン・アルニム[23]の22巻全集の大揃、クリンガー[24]、レンツ、ブレンターノ[25]、クライスト[26]、ハイネのほとんど手垢のついていない多数の初版本があり、他方では同じたくさんあるルイーゼ・ミュールバッハ[27]やクラウレン[28]の小説は、かなりはっきりと読まれた形跡を示していた。とくに私を喜ばせたのは、極端に稀少な『ボナヴェントゥーラの夜警』の1コピーだった。いまでも著者が誰か争われているこの本の新版はこのコピーによってつくられたものと私は思っている。がっかりさせられたのはある文庫で、持主はこの文庫の本からコ

21) Mörike, Eduard(1804-1875) ドイツの抒情詩人，シュヴァーベン派の代表者。

22) Lenz, Jakob Michael Reinhold(1751-1792) ドイツの詩人，劇作家，ゲーテと交流。

23) Arnim,Achim von, 本名 Ludwig Joachim von Achim(1781-1831) ドイツのロマン派作家，ブレンターノと協力してドイツ民謡集を集成。

24) Klinger, Friedrich Maximilian(1752-1831) ドイツの劇作家，小説家，ゲーテの幼な友達，「シュトゥルム・ウント・ドランク」は彼の戯曲名から文学運動をあらわすことになった。

25) Brentano, Clemens(1778-1842) ドイツの詩人，アルニムの協力者で，妻はアルニムの妹，経済学者 Lujo(1844-1931) は彼の甥。

26) Kleist, Heinrich von(1777-1811) ドイツの劇作家，小説家。

27) Mühlbach, Luise 本名 Mundt, Klara(1814-1873) ドイツの社会小説，歴史小説家。

28) Clauren, Heinrich, 本名 Carl Gottlieb Samuel Heun(1771-1854) ドイツの通俗作家，『プロイセン国家新聞』編集長(1820-24)，センチメンタルな大衆の趣味に迎合した大衆小説を書いた。

ドヴィエツキー[29]やマイル[30]などの美しい銅版画を切りとって、蒐集帳にきれいに貼りつけてしまったのだ。外国文学の初版本も愛書趣味のこの黄金時代には、まだ安く手に入った。たとえば、私は翻訳家フリードリヒ・フォン・オーペレン－ブロニコフスキー[31]に、ベルギーやフランスからスタンダールの初版本を20から30フランで世話してあげた。

愛書趣味の分野というよりは実際的な人間くさい分野に入る経験を私は1920年ころもったことがある。朝早くからきびすを接してありとあらゆる名士が、高級役人、将校が、芸術家や学者までもがほとんど誰もが、手に手に青色の手紙をもって現われ、それぞれの性分次第である人はきまりわるそうに、ある人はなんでもないように装いながら、「お宅に『ドッペルテ・モラール〔二重の道徳だが、表と裏を使い分ける手前勝手な御都合主義の道徳〕』という本がありますか？」と尋ねた。聞く人の数がますますふえたので、私は面くらった。しばらくしてことの次第がはっきりした。ガンターとかいう男がなんとも言うに言われぬほどのインチキな小説を書いて．この代物の売上をのばすためにある数のベルリンの名士へ完全に同文のつぎのような内容の手紙を書いた。「あなたが御自分の過去の生活についていささか読んで調べたいようでしたら『ドッペルテ・モラール』をお求めになり、……ページをお読みください。」すべてうそばっかりだった。それにもかかわらず手紙の受取人の多くは拙劣なまやかしに引っかかったのである。だが羞恥心が私たちが一般に考えているよりずっと稀だというのは、大いに考えさせられる。

私のいちばん初期のお客のなかに．当時マールブルク街に住んでいたリルケ[32]もいたが、彼はひどく無口だった。かれはとりわけヴェ

29) Chodowiecki, Daniel Nikolaus(1726-1801) ドイツの画家。銅版画家，書物挿絵の作品が多い。

30) Meil, Johann Wilhelm(1733-1805) ドイツの線描画家，銅版師，フリードリヒ大王、レッシング，ゲーテ，ヴィーランドの著作の表題紙などの装飾銅版画を製作。

31) Oppelen-Bronikowski, Friedrich von(1873-1936) ドイツの伝記作家，歴史家。

32) Rilke, Rainer Maria(1875-1926) ドイツの抒情詩人。

ルレーヌ[33]やランボー[34]を買い、印刷のよい版本や美装幀本に大金を投じ、しばしば買った本をもってすぐにパッサウ街の製本師ヘルフルトのもとへ行った。陽気で太っちょのマックス・スレーフォークト[35]は、クーパー[36]、シムス[37]、マリアト[38]、カール・マイ[39]の古い挿絵入り版の冒険小説をとりわけ尊重したが、彼にとってはこれらは、彼みずから言ったように、もっともよい気晴らしであり、同時に刺戟でもあった。この時代からの私の自筆物蒐集のなかに、私はトーマス・マン[40]の数ページの手紙（ミュンヘン、1913年）をとくに自慢の品として所蔵しているが、彼はこの手紙のなかで彼の著作の公刊について懇切ていねいに情報を与えている。 まったく独特の尖った、たいへん明晰な筆跡は、私には筆跡鑑定のうえでいつもとくに興味があった。個々の言葉の姿かたちははっきりと下へ向かって下がって行き、いわば誠実な活気ある入念さで本当におどろくべきエネルギーでそれぞれ新しい言葉がふたたび上からはじまり、ふたたび下がってたゆまずに芸術家風に美しい繊細に彫琢された自筆の署名「トーマス・マン」まで下がって行く。ゲールハルト・ハウプトマン[41]の手紙は農民戦争の文献を扱っているが．彼がこれに関心をもったのはおそらくフローリアン・ガイヤーを書く準備のためだっただろう。私はなによりもグノダリウスの『ポイリッシュと抗議戦争』(1573)」と共産党宣言の先駆である1525年に出た「農民の12箇条」の初版を彼に世話した。

響のよいそのほかの名前は、シュテファン・ツヴァイク[42]、ヴァ

33) Verlaine, Paul Marie(1844-1896) フランスの印象派詩人。
34) Rimbaud, Jean Nicholas Arthur(1854-1891) フランスの印象派詩人。
35) Slevogt, Max(1868-1932) ドイツの印象派画家。
36) Cooper, James Fenimore(1789-1851) アメリカの冒険小説家，インディアンを扱った。
37) Simms, William Gilmore(1806-1870) アメリカの小説家，南部に取材した。
38) Marryat, Frederick(1792-1848) イギリスの小説家，海事小説，少年書物を著す。
39) May, Karl(1842-1912) ドイツの作家，北米インディアンを素材とした作品が多い。
40) Mann, Thomas(1875-1955) ドイツの小説家。
41) Hauptmann, Gerhart(1862-1946) ドイツの劇作家，『フロリアン・ガイヤー』は彼の戯曲の一つ。
42) Zweig, Stefan(1881-1942) オーストリアの作家，評論家。

インガルトナー[43]、老ティーミヒ[44]、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール[45]、マイリンク[46]、クービン[47]、ヘルマン・ヘッセ[48]、トラー[49]（彼のリーダー＝シェーネンフェルト要塞監獄からの葉書を私はとってある）、ゲオルク・カイザー[50]、ルートヴィヒ・フォン・ホーフマン[51]、シュトゥッケン[52]．ヘルベルト・オイレンベルク[53]、カウツキー[54]、その他大勢だ。有名な俳優たちの手紙は、いわば一本調子の性質を帯びていて、その文意はたいていは「‥もう少し待って下さいね」だった。とてもよく見えたお客は文学史家グンドルフ[55]で、彼がごく近所に住んでいた友人のマックス・ヘルマン教授[56]を訪れて、自分の著作（ナポレオン、カエザル史等々）のための材料を必要としたときには、いつも私のところへやってきた。いま挙げたマックス・ヘルマンは文学史家で演劇学者であり、特別に興味ある人物だった。彼の見かけはE．T．A・ホフマン[57]の小説から飛びだしてきたような、天才風のなりふりかまわない様子で、そのくせ実に上品な礼儀作法を心得ていた。彼の豊富な蔵書はその持主と本質的な類似を示していて、たいへん内容が充実し多方面にわたっていたが、本自体も大分傷んでいた。この独創的で鋭敏な学者は、夫人と夫人の妹といっしょにナチスによってテレジエンシュタットへ連れて行かれ、そこで

43) Weingartner, Joseph(1885-1957) ドイツの作家，美術史家。
44) Thimig, Hugo(1854-1944) オーストリアの俳優，ブルク劇場支配人。
45) Hofmansthal, Hugo von(1874-1929) オーストリアの詩人，劇作家。
46) Meyrink, Gustav(1868-1932) オーストリアの神秘主義作家。
47) Kubin, Alfred(1877-1959) ベーメン生れのオーストリアの画家，幻想的挿絵で著名。
48) Hesse, Hermann(1877-1962) スイスの詩人，作家。
49) Toller, Ernst(1893-1939) ドイツの劇作家，ミュンヘン革命に参加，ナチス支配後アメリカに亡命。
50) Kaiser, Georg(1878-1945) ドイツの表現主義劇作家，ナチス支配後スイスへ亡命。
51) Hofmann, Ludwig von(1861-1945) ドイツの画家。
52) Stucken, Eduard(1865-1936) ドイツの作家。
53) Eulenberg, Herbert(1876-1949) ドイツの劇作家，小説家。
54) Kautsky, Karl Johann(1854-1938) ドイツの社会民主党指導者。
55) Gundolf, Friedrich, 本姓 Gundelfinger(1880-1931) ドイツの文芸学者，シェークスピア研究家。
56) Herrmann, Max(1865-1942) ドイツの文学史家，1919年にベルリン大学教授，1922年に演劇史研究所を創立。
57) Hoffman, Ernst Theodor Amadeus(1776-1822) ドイツの幻想的ロマン作家。

彼は直ぐに死んだ。心臓を病んでいた夫人はアウシュヴィツへの移送をきめられていたが、彼女の健康な妹は自分は助かることができたかもしれなかったのに、姉を見捨てようとはしないで、自発的に姉と死への途に同行した。ゲオルゲ[58]のサークルからは私はミュンヘン出身の大蒐集家ヴォルフスケール[59]にも、メルヒオル・レヒター[60]にも私のところでよく会った。私が持っていた本のうちでもっとも豪華な装幀だったのは，たぶんレヒターのインド旅行日記だろう。これはフォリオ判で金の板に綴じられ、宝石で飾られていて、たった3部しかつくられなかった特装版のひとつだった。しばしば人智学者ルードルフ・シュタイナー[61]が訪ねてきた。彼も夫人も異常に小さい体格だった。二人とも広い関心領域の持主だった。彼らはとりわけ、初期の版で神秘主義者を探したかと思うと、古い経済学者、リカードゥ、ミル、またマルクスやラサールを初版本で探し求めた。ジャン＝パウル[62]の各版を探したのはクリスティアン・モルゲンシュテルン[63]で、彼はシュタイナーと親密であり、彼に自分の最後の詩をも捧げた。

第一次世界大戦までの数年間に、読書界の興味は、深く突っ込んだ文学上、書誌学上の知識がなくては適切に収集もできないし、また評価もできないふるい初期の元版から、ますます近代の豪華版へ向けられるようになったが、こういう版そのものは一部にはたしかに見たところたいへん美しく、多くのばあいに本物の工芸品でもあったが、しかしまた買手の皮相な、俗物趣味に迎合するものだった。たとえば大工業家フーゴー・シュティンネス[64]は、あらゆる豪華版の「第1号」だけを集めた。一部の出版社はまったくばかげたことに限定版の文字通りの大量生産によってこの趣味の傾向を利用したので、たちまち読書界は食傷した。

58) George, Stefan(1868-1933) ドイツ近代を代表する大詩人。
59) Wolfskehl, Karl(1869-1948) ドイツの詩人，文化哲学者。
60) Lechter, Melchior(1865-1937) ドイツの画家。
61) Steiner, Rudolf(1861-1925) ドイツの哲学者、人智学を提唱。
62) Paul, Jean, 本名 Richter, Johann Paul Friedrich(1763-1825) ドイツの風刺ユーモア作家。
63) Morgenstern, Christian(1871-1914) ドイツの抒情詩人。
64) Stinnes, Hugo(1870-1924) ドイツの実業家，コンツェルン王。

こうして、昔から慣れ親しんできた関係が消えて行くきざしが愛書趣味のような、一見したところなにも関係のないような領域にも出てきた。こういう動きは個人的に根っから気に入らなかったので、私は自分の関心をいよいよ学術上の古書業に向けることとした。

1921年にビスマルクの回想録第3巻の出版が大センセイションを起こしたが、この巻は宰相とヴィルムヘルム2世との決裂を意味し、その公表はビスマルクの遺言によると、もともと先帝の死後にはじめ公刊されることになっていた。誰もが既刊の巻をすでに読んだかどうかにお構いなく、当時この第3巻をほしがった。典型的な大衆心理だった。当時はこの巻の貨車便全部がベルリンへ着いた。量的に同じくらい大きなセンセイションは、1910年に行われたゲーテのウル＝マイスターのハリー・マインク[65]による発見とそれにつづく公刊であったが、これが及ぼした影響の広さはさほどではないにせよ、その深さがかなり大きかったことがセンセイションを補ったのであって、この発見はその意義の点でエーリヒ・シュミット[66]によるウル＝ファウストの発見にまさるとも劣らぬものだった。

第一次世界大戦に続いて超インフレーション時代になったが、これが新しい種類の「愛書家」を誕生させた。それはホーム・バーや体育室のほかに図書室をも設けた連中で、これはもうなくてはならぬものだったからだ。「うちにはまだ2メートル半ばかり足りないのよ」というのが一度ならず聞かされた言い草だった。「どんな事典の手持があるかね？」(事典はとくに好まれた。というのは場所ふさぎになり、揃いものなのでもってこいの飾りになったからだ)。同じ理由から「全集」も――これはいつも古典派作家もののことだが――たいへんありがたがられた。私にとくにシェークスピアを勧められた或る御婦人は、おどろいたことにこう答えた。「いいのよ、結構だわ。もうスコヴロネク[67]をもってますもの」。

そのころよく読まれたこの通俗作家は、彼女にとってはエイヴォ

65) Mayne, Harry(1874-1947) ドイツの文学史家, 1907年にベルリン大学, 1929年にマールブルク大学教授, 1911年に『ゲーテのヴィルヘルム・マイスターの劇的使命』を発表。

66) Schmidt, Erich(1853-1913) ドイツの文学史家, ゲーテの『原ファウスト』の発見者。

67) Skowronnek, Fritz(1858-1939) ドイツの作家, 狩猟物語や娯楽小説の著者。

ン河の白鳥[68]よりはずっとお馴染だったのだ。もちろんこんなことがとんでもない読書家を生みだすことになって、たとえばマギー[69]〔Maggi〕と色ごと（マジーだ！〔Magie！〕）についての本をほしがった女の子や東プロイセン出の将校当番兵がそれで、これなどはトイレットペーパーをほしがったのだが、本しかないと説明されると、平気な顔をして「じゃ本を1冊下しゃい」と答えたという次第だ。

すべてこういう有様だったので、私はますます文芸本から学術書の古書へと追いやられることになった。そしてこれはとくに政治、経済学、社会主義、労働問題の分野の古書であり、私はよりいっそうこれらの分野と取り組んで、今日でも私の専門はこういうところだ。マルク安定の直後に、自然科学者で収集家のルートヴィヒ・ダルムシュテッター[70]、外科医オイゲン・ホレンダー、有名な風俗史編集者エードウアルト・フックス[71]をメンバーとする委員会が将来はもっと広い基礎に立って国際的に拡充される予定の、かなりの大資本で設立される図書学研究所兼学術古書業の管理運営を引き受ける意志があるかと私に近づいてきた。しかし私はそんなに長くも考えないでお断りした。一つには私は自分の独立自営を好んでいたし、他方で私のすべての性向と相容れない大組織という着想にもおそれを抱いたからだ。

1921年にモスコウのマルクス＝エンゲルス研究所長リャザノフ[72]教授が設立されたばかりの彼の研究所のために本の調達を目的にベルリンに来ていた。私は彼のためにとりわけ刊年のない．スイスで出た

68) シェークスピアを指す。

69) スイス人 Julius Maggi(1846-1912) が発明したスープやソース用の調味料で，いまもネスレがマギーブイヨンとして発売している。この女の子は恋愛と手品の本を求めに来て、Magie〔マジック〕を maggi と発音したのだ。

70) Darmstätler, Ludwig(1846-1927)　ドイツの科学者，自然科学史家，『自然科学史および技術史ハンドブック』(1908) の著者。

71) Fuchs, Eduard(1870-1940)　ドイツの風俗史家，社会民主党のフランツ・メーリングと親しく，メーリングの『マルクス伝』を編集した。

72) Rjasanoff, David Borisovitch, 本名 Goldendach(1870-1938)　ソ連のマルクス＝エンゲルス研究者，1920年代にはモスコウのマル＝エン研究所長，のち粛清さる。

『ドイツの農民』[73] と題する匿名の小冊子を世話した。二人の調べによってこれがフリードリヒ・エンゲルスの逸書であることを私たちは確かめた。

国家学の分野をとくに心掛けていたことから、私には同じ年にこのころ研究のためドイツに滞在していた日本人の科学者のあいだに、かなりの数のたいへん興味深いお客ができた。最初の客の一人として日本の富豪大原の子息[74] によって大資金で設立されたばかりの「大原社会問題研究所」の所長[75] が訪ねてきた。私が聞いたところでは、大原二世は社会主義的な友人たちと協力しているうちに、「資本主義の間違いと社会主義の恩沢」を認識し、抗議としてこの研究所を誕生させたという。大部分の人は私の専門分野ゆえに私のところへやってきたのだが、でも日本人は千差万別の蒐集分野をもっていた。ある人はマルクス主義以前の社会主義著作を、他の人は床油についてのあらゆる文献を、また他の人はゲーテと彼の時代、旧約時代の予言者等々の文献をほしがった。ある近代語学者はドイツ語の辞典をあつめ、私は彼に豆辞典からはじめて大グリムにいたるまで約 30 点のいろいろな辞典を世話した。少数の例外はあったが、彼らは反ファシストで

73)『ドイツの農民。彼はなんであったか, なんであるか, またなんでありうるか？』(Der deutsche Bauer. Was war er? Was ist er? Was könnte er sein?) というリーフレット。エンゲルスは,『空想から科学への社会主義の発展』のドイツ語版 (初版 1883 年 3 月 5 日発行) に『ディ・マルク』というドイツ古代以来のマルク共同体を扱った付録をつけた。これは同時にドイツ社会民主党中央機関紙『デル・ゾツィアールデモクラート』に 6 回連載された (1883 年 3 月～ 4 月, Nr.12 ～ 17)。社会主義者取締法のため同党はスイスに亡命中だったので, これらはチューリヒで発行された。『ディ・マルク』はドイツの土地所有制度の歴史を対象にしていたので, 同党は国外からドイツの農民に働きかけるのにこれを利用しようとして, 編集長エードゥアルト・ベルンシュタインがエンゲルスに農民プロパガンダ向きに加筆を依頼した。エンゲルスは外来語のドイツ語への翻訳, 典拠の削除, そのほか末尾に 3 パラグラフを書き足し, 農民向けに模様替えし, 表題を上記のように変えた。この 13 ページのリーフレットは 1883 年 11 月下旬に発売され, ドイツ国内へ非合法に持ち込まれた。部数は 1 万部というデータがあるので, それほど稀少とは思われないが, 押収とリーフレットの一過性のため 1920 年代初には残るものが少なくなっていたのであろう。

74) シュトライザントは「大原の息子」と言っているが, 大原孫三郎を指しているとすれば, 子息というのはおかしい。

75) 所長は高野岩三郎だが, シュトライザントと取引したのは森戸辰男と言われているので, 森戸のことか。高野も訪問したかもしれないが。

あり、彼らのなかには一部に非常に急進的な社会主義者がいて、彼らはその思想を深めるためにヨーロッパへやってきたのであって、そのうち何人かは日本へ帰国後すぐに逮捕されてしまった。私は今日の政治指導者の名前のなかに知人がいるかどうか、いまでもときどき探している。ヨーロッパで生活している日本人の一部のものの社会主義的傾向は、たいへん疑い深い政府にも知れていた。二人のスパイが同胞の監視を委任されてベルリンにいた。しかし彼らは私の店ではよく知られていた。そこで店員は彼らが同胞の名前を探りだすことができないよう気をくばった。本物の友好関係が私と日本人の学者向坂〔逸郎〕教授とのあいだに結ばれた。向坂は15巻[76]の日本語版マルクス＝エンゲルス全集の編集者だった。彼も日本へ帰国直後に数年の禁固刑を宣告された。向坂は日本の雑誌[77]に彼のベルリン滞在について一文を書き、そのなかでは私の書店のことも述べられていて．そこにはつぎのひとくだりがある。「ドイツでいちばん不愉快に感じたのは、ユダヤ人に対するいわれない憎悪感だった。私がユダヤ人と付き合ったかぎりでは、彼らはいつも私には気遣いしなかった。政府の役人の細君だった私の下宿の主婦は、教養ある婦人だった。けれど私は彼女のユダヤ人についての憎しみに満ちた見解を聞いて、私はすべてばかげていて、いわれないと見てとった。……日本人のなかにはユダヤ人の危険について云々するものも何人かはいる。おそらく彼らはこういう憎悪の話をドイツでの下宿の連中から聞かされて、受け売りしている。」日本人との会話の疎通は必ずしも簡単ではなかった。私自身は日本語ができなかったし、英語とドイツ語を使っても彼らとは話が十分通じなかった。たとえば彼らにはＬとＲ（日本語にはＬがない）の文字は大きな難物だった。いつか私は「霊安室」(Leichenhalle)についての長い文献リストをつくらされたが、あとで温泉場のライヒェンハル（Reichenhall）のことを言っていることに気付いた。

しだいに私たちは1933年という年へとやってきた。それとともにユダヤ人の血統の私には．私たちの生涯の特殊な暗い時代がはじまっ

76) 改造社『マル＝エン全集』は最終的には本巻30巻，別巻1冊，補巻1冊，計 32冊となった。

77)『文藝春秋』昭和9年(1934)11月号。

た。私のユダヤ系の親戚や知人の大部分は、「政権獲得」に際して即刻ドイツを見限った。私はそういうことは考えなかった。自分の父祖が何世代以来ドイツ語の書物のために尽くしてきた私は、ひとつにはドイツ人であることは全く自明だと感じていたし、乱暴狼藉を働く徒党に対してこの主張を簡単に放棄するつもりは少しもなかった。他方では国会議事堂放火事件、突撃隊の行動、1934年6月事件[78]にあらわれたような、暴力団や殺し屋どもをつきまぜた輩の所業の数々は破滅に瀕するであろうし、生きつづけられぬと私には思われたので、私は彼らの急速な破産を完全に確信していた。そして私が考えたのと同じように他の多くの人々も考えていた。新しい暴力行為のたびに私たちは「いよいよ急速に奴らはおしまいだ」と元気づいていた。つづく数年間はこのような予想そのものがまちがいではなかったことを示した。そもそも12年間というものは、歴史の上から見ればけっして長い時間ではないのだ。私たちの想像を絶したのは、これだけの年の恐ろしい結果だけだった。

このころ私の書店をよく訪問した女性は、市立シャルロッテンブルク劇場に出演していた声楽家ロザリンド・フォン・シーラッハだった。彼女を通じて彼女の兄バルドゥール・シーラッハ[79]も何回か私の店へやってきた。楽しそうにのんびりとして、彼は個人としては党規にしばられていないという風に見えた。或る日、彼が誰にも見られていないと思って、彼のつれに或る本を指さしたところが、その本が二人のあいだにどうにも抑え切れない笑声をひき起こしたのを私たちは見てしまった。私がこのおもしろ笑いのわけをよくつきとめてみたら或る客のためにとっておいた「われわれはヒットラーととにも飛ぶ[80]」……」という本だったことがわかった。

私のいちばん古い客の一人は、経済学者ゾンバルト[81]教授だった。

78) 1934年6月に起こったナチス内部の粛清事件。レームを指導者とする突撃隊がヒムラーの親衛隊(SS)によって襲撃され，レーム，シュライヒャー，シュトラッサーが殺された。

79) Schirach, Baldur von(1907-1974) ナチスの幹部，青年将校，ヴィーン管区長官，ニュルンベルク裁判で20年の禁固刑。

80)「飛ぶ」の原語 fliegen には「ころぶ」という意味もあるので笑ったのか？

81) Sombart, Werner(1863-1941) ドイツの経済学者，ベルリン大学教授，初期はマル

彼はその初期の思想からの転向をやってのけたのだが、彼はこの転向を外面的にはかれの大蔵書のマルクス主義的部分を日本へ売ったということによっても裏書きしたわけである。もう一人の社会学者フランツ・オッペンハイマー[82]教授は日本へ渡ったが、彼は「黄色のベンチに坐る気は起こらないね」と別れのさいに私に言った。——のちに彼はアメリカへ行き、数年前に同地で亡くなった。——ミルヒ将軍[83]の母親は彼女の婚姻関係を宣誓によって放棄して、自分の息子の栄達を助けたのだが、将軍のユダヤ系の親戚が移住するまえに私に教えてくれたところでは、彼とその一家全体は懲罰——つまりやはり集中収容所かそれとも死か——のおどかしで将軍の親戚と名乗ることを禁じられたとのことだった。

収容所で行なわれた残虐行為に対する直接的責任は、しばしば全ドイツ国民に帰せられて、誰もがそのことを知らなかったにちがいないなどということはありえないと言われるが、これにたいして私は二、三の目撃したところを伝えておきたい。ユダヤ人や社会主義的な私の多数の友人のなかに，かなり長い時間収容所で過ごし、ついでいろいろな理由で釈放された人も幾人かいた。釈放後に彼らの何人かと話した。みんなひどく憤慨していたものの、自分らの体験をすこぶる漠然とした表現でしかしゃべらなかった。彼らは収容所の囚人だといううわさであったが、一部には毎日通っていた人々にしても誰もこの人々に加えられた残虐行為について少しも知らなかった。収容所は恐怖の雰囲気に包まれていた。しかし直接に参加した者以外には、誰もそこで実際になにがあったか知らされなかった。

私の周辺はだんだんさびしくなってきた。たくさんのユダヤ人の知人や親戚は移住した。たいていの「アーリア人」は少数の例外にいたるまで私を避けはじめた。1935年以来、衰え行く力で守ってきた私

クス主義に傾いたが，1920年代よりナチスに迎合，本文にあるように当時，彼の蔵書は大阪商大が購入した。

82) Oppenheimer, Frantz(1864-1943) ドイツの経済学者，社会学者，フランクフルト大学教授，ナチスに追われ，日本を経てアメリカへ亡命。

83) Milch, Erhard(1892-1977) ドイツの空軍将校，第1次大戦に活躍，1933～44年に航空相，1936年に大将、1947年に国際軍事法廷で終身禁錮刑を宣告され，1954年に釈放さる。

の書店は――私はハンス＝アルトゥール・フォン・ケムニッツ氏に忘れようとて忘れられぬ恩義を負っているが、彼は私や他のユダヤ人の知人のために恐れることなく戦ったので、しまいには自分白身ゲシュタポの手から逃れなければならなかった――1938年11月[84]にこわされてしまった。ガラスのかけらと本の断片の真中で私たちは一時しのぎの生活をおくり、うす暗いなかで下ろしたブラインドの裏で、半ば人目をしのんだかつかつの暮らしをつないだ。二、三の懇意な客が相変わらず裏口からやってきたが、とうとう1939年2月にライヒ文献局[85]（Reichsschrifttumskammer）の指令が私の職業の続行を最終的に禁止した。その理由は、私は「ユダヤ人としてドイツの文化的利益を代表する」資格がないというものだった。店はゲシュタポによって封印され、ストックはライヒ文献局の強制によって早急に売却されなければならなかった。或るライプツィヒの業者が一部には第一級の稀覯本もあった7万冊を1冊当たり10ペニッヒで買った。社会主義文献全部にたいしては「目下販売不能に付きという理由で」まるっきり払ってくれなかった。これらの本はライプツィヒの爆撃のさい破壊されてしまった。私は自分の財産を本につぎ込んでしまっていた。債務にはできるだけ広く応じたので、そのさい一部の出版社は非常に寛大な態度をとってくれたが、私たちは無一文となった。私の妻は下宿人を置いて、タイプライターや複写の仕事をやった。私自身はお手伝いとも走り使いともいえぬどっちつかずの役をつとめた。そのうちにだんだんと、適当なときに逃げなかった親戚や知人の絶望的な立退きがはじまった。くり返される逮捕、家宅捜索、基本的人権の新たな制限がとっかえ引きかえ起った。日毎に少しづつ低く不運な囚われ人の上に沈んできて、或る日ついには彼らを粉々にするであろうヴェネツィアの鉛の部屋の鉄の天井のように、生きているということが私たちの上に沈んできて重荷となってのしかかった。私たちが築き上げたかつかつの生活は、私の妻が特殊な「MI（混血婚）行動[86]」とい

84) 1938年11月9日夜から10日朝にかけて起こった，ナチスによるユダヤ人商店，住宅，シナゴーグ焼討ち事件，いわゆる「水晶の夜」（Kristalnacht）を指す。

85) 1933年9月に創設されたナチスのReichskulturkammerを構成する7つの文化統制機構のひとつで，著作活動，出版業を担当した。

86) 宗教，人種の異なる婚姻関係者に強制労働を課するナチスの政策。

うことで或る工場で勤労奉仕を義務づけられたので、めちゃくちゃとなった。私の息子は収容所に入っていたし．娘は幸いにもまだ可能とされた大学入学資格試験を終えて店員として働いていた。ついで爆撃がやってきて、私たちの街の3分の2は破壊された。私たちはナチス支配の終わりがいよいよ近づいてくるのを見てとった。しかし私たちはそれを体験する望みをすてた。問題はただ爆弾かそれとも強制立退きが終わりをもたらすであろうか、そのどちらかだった。

当時私の身にふりかかったように、自分の生存がいまにもばらばらになりそうにゆさぶられている人は絶望して呆然自失するか、それとも万有を担うに足りる強力な手中に己れを投げ入れ、しかもなお戦慄く人の心を守りながら身を伏せることを辞さないか、どちらかだ。私たちのあらゆる予想に反して、私たちは終末を生きのびた。いささか心もとなく、ぐらついてはいるが、全体としてそこなわれずに暗黒から抜け出して、内的かつ外的な総括をやろうというところだ。そのまま残してよいのはなにか？　なにが来るのか？　70歳の者には滅多にない問題だ。それでもなお彼は17歳の者と同じように答えを求められるのだ。親しい人々は逝ってしまったし．昔からの生活形態はついえてしまった。私のベルリンは破壊され、そこなわれてしまった。だが書物は、あらゆる伴侶のうちでいちばん愛した、いちばん忠実な伴侶、慰め――逃避の対象――指針は残っている。過ぎ去った時にも今日も。

あ　と　が　き

これはHugo Streisand：Ein halbes Jahrhundert mit Büchern 1901-1951、Berlin、〔1951、Selbstverlag〕に収められているAus meinem Leben　の訳文である。この全体でグロースオクターフ判63ページのブロシューレは、表題のとおりシュトライザントが創業50年を記念して自費出版したものだが、はしがきによれば、すでに新聞や雑誌に発表したものを集めて、50年記念に感謝の印として友人たちに提供したという。内容は以下のとおり。

Buchhändler und Bücherkäufer S.3 － 4; Vorbotene Bücher im

harmlosen Gewande S.5 − 6;Ein unbekannter Heinrich Heine ? S.7 − 8; Utopien aus zwei Jahrtausenden S.9 − 35; Ludwig Gall S.37 − 53; Aus meinem Leben S.55 − 63.

以上でおわかりの通り、シュトライザントは20世紀初めからベルリンにあった古書店主である。ヴァイマール時代のベルリンへ行った日本人に馴染があったというので、わが国の図書館人や学者には名前がよく知られていたが、その経歴や営業振りなどは断片的にしか伝えられていなかった。1983年にナウカの安形さんがベルリンへ赴いてシュトライザントを訪問し、この冊子をもらってきて、これがわがブックマン細谷新治さんのところへまわってきて、彼が私にこれを示して訳しなさいと言ったのがこの年の秋ころだった。一見おもしろそうなのでなんとなくいいともと言ったのが運のつきだった。読んでみると、社会科学畑の私とは縁の遠い文芸人との交流の話が多くて、そういう方面や20世紀初期のベルリンの事情に通じていないとままならぬといった代物ということがわかった。そのうちにその道の専門家にいろいろ聞いてからやりますよと言っているうちに、とうとう今日にいたってしまった。実は調べは一向進んでいなかったのである。戦後ヴアイマール時代やナチスの研究は汗牛充棟ただならずで、そのなかからこれを訳すにの参考となる情報をとりだすのはとてものことではない。幸い立教大学のドイツ文学者平井正さんのベルリン3部作『ベルリン 1918 − 1922　悲劇と幻影の時代』、『ベルリン 1923 − 1927　虚栄と倦怠の時代』、『ベルリン 1928 − 1933　破局と転換の時代』(1980 − 1982、せりか書房) やこれによった長沢均＋パピュ・コレ著『倒錯の都市ベルリン 1918 − 1945』(1986、大陸書房) といったありがたい本が出ているのを知って、これらをぼつぼつのぞいたのだが、なかなかとりかかる気になれなかった。

ところが今年 [1989] も2月に入ってからアジ研の松本さんから編集担当が西部会に移り、載っけることになったと大阪経大の崎田さんから催促があった旨伝えられ、その直後に崎田さんからも連絡があったので、絶体絶命とりかかったわけである。そういうしだいで準備不足がたたってシュトライザントの記すところがよくわからない点が

間々あった。

未知の平井先生に教えを乞いたいと思ったが、とても余裕がない。なんとか辻つまを合わせたが、能力不足につき誤訳、不適訳も多々あろうが、御寛恕を請う。

さて本文には文芸人を主として無慮80人の人名が出てくる。ゲーテやシラーやハイネはともかく、シュトライザントが接触した人物が何者かをやはり注記しておいた方がよろしかろうと存じて、手もとの人名辞典などでわかる限り生没年をふくめてごく簡単に訳注に入れておいた。注番号だけで記述がないのは調べられなかった人物である。図書館へ赴いて調べればもっとわかるであろうが、昨年末の心電図検査で不整脈がわかり、また1月下旬に佐藤金三郎さんが心筋梗塞で急死されるという大ショックを受け、学年試験後は外出を控えて休養中なので、調べが行きとどかなかった。

もう一つ心残りなのは日本人とシュトライザントとの関係をこちら側の材料で補えなかったことである。彼の日本人についての記述は原文の1/8弱に止まり、またいささか正確ならざるところもあるようだ。はじめは大原社会問題研究所や向坂逸郎先生との関係を大原で調べて補うつもりだった。向坂文庫は大原に寄贈され、目下整理中であるが、すでにシュトライザントやその店の写真、向坂先生への納品書や勘定書はガラスケース入りで展示されている。整理が進むにつれて手紙やカタログ類も出てくるのではないかと期待される。なお本文中にあるように、向坂先生はシュトライザントのことを日本の雑誌に書いているのだが、私も戦前に『文春』で読んだような気がする。戦後の著書に収まっているのではないかと思う。著作目録もできているのかどうかわからないので、調べがつかなかった。

シュトライザントを中心に大原研究所が蒐書した当時の事情は、櫛田、森戸、久留間の諸先生によってすでにあれやこれやの形で伝えられているが、向坂先生のほかに1920年代にベルリンに留学した人々はたいていシュトライザントを訪ねているらしいので、もっと探せば訪問記はあるはずだ。中村弘光さんが教えてくれた有沢広己先生の『学問と思想と人間と』(1957、毎日新聞社)のなかの「ベルリンの古本屋」という一節はシュトライザントに充てられており、また先生のヴァイ

マール時代についての自家本2点を私は見ていないが、これにもあるかもしれない。いずれにしてもシュトライザントと日本人との関係については、向坂文庫を所蔵する大原研究所の方々が今後の課題の一つとして補いをつけて下さらんことをお願いする。

さて最後に戦後のシュトライザントのことだが、ベルリン解放後いつごろ再開したのであろうか。私の手もとに1953－54年ころのカタログがあるところからすると、1940年代には再建なったことと思われる。この当時のカタログはリスト形式で350点くらいのものだが、1956年ころは70ページほどの冊子体となっている。住所は戦前はアウグスブルク街であったが、戦後はアイスレーベン街4となっている。もっとも1932年6月にランケ街21という五来欣造教授あての納品書もあるが、地図で見るとみんな近所である。同じ場所で街名改正なのか移転したのかわからない。訪問したナウカの安形さんに聞けば氷解するであろうが、これも問い合わせる時間なし。もう一つ極東書店の一条さんが1986年秋に提供してくれた材料がある。これは新刊書購入申込用はがきに押してあったスタンプで、Buchhandlung Streisand Nachf. Ersula Zilli、Pariser Strasse 39というものである。これをそのまま解すれば、シュトライザントは主人没後に看板をZilliなる女性に譲ったようにとれる。古書を扱っているかどうかはわからない。本文中に出てくる収容所に入れられていた息子はJoachim[1920-1980]といい、戦後フンボルト大学の歴史学の教授であったが、一条さんの情報ではこの人も数年前に亡くなった由で、店の後継者がいなくなって廃業したのかもしれない。

(追記) 書き終えて送る準備をしていたら、『大原社会問題研究所雑誌』363・364合併号が届いた。題して〔創立70周年・合併40周年記念特集、大原社研の歴史と現状〕という146ページの大冊である。所蔵図書・資料の解説が70ページ余もあり、また「大原社研および所蔵文献・資料に関する文献目録」も附されている。後者に掲げられた文献中にシュトライザントが出てくるものがあるはずだから、関心のある向は参照されたい。

(1989年3月6日　記す)

(再追記)

追記を書いてから20年近くになってしまったが、当時はなぜ掲載しなかったか、いまは明確な記憶が残っていない。

訳注が不完全だったこと、翻訳権（著作権は著者没後50年まで）がとれていなかったことが掲載延引の理由だったような気がする。このたび、『経済資料研究』が最終号を迎えることになったので、仕掛品に手をいれて積年の責を果たすこととした。訳注もなんとか埋めたが、不十分であろう。

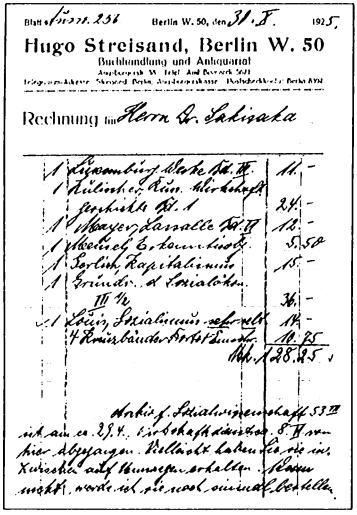
なお、いつ頃だったか忘れたが、誰かが丸善の『学鐙』に既訳があることを教えてくれた。同誌の第49巻第5号（1952年5月に「ある本屋の生涯」と題して、向坂逸郎先生の解説が冒頭についているのがそれである。シュトライザントが向坂先生に直送したので、早い時期に実弟の山崎八郎教授（早稲田大学ドイツ文学専攻）に翻訳を頼んだようだ。細谷さんがナウカの安形さんから原文をもらって、私に訳してはどうかと言われた当時（1983年）は既訳があることをわれわれは知らなかった。

私は訳し終えたあとでこのことを知ったのではないかと思われるが、これも掲載を当時保留した原因だったかもしれない。

最後にシュトライザントの納品書などのコピーを資料として添えておく。

また永年にわたり編集委員の各位に御手数をかけて、いまここに三拝九拝いたします。

(2008年8月26日満95才を1箇月後に控えて記す)


Blatt Nr. 256 Berlin W. 50, den 31. X. 1925

Hugo Streisand, Berlin W. 50

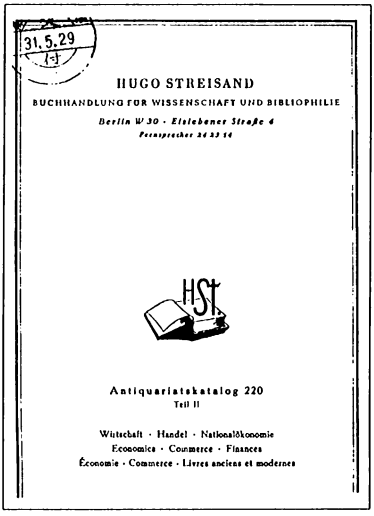
Buchhandlung und Antiquariat

Rechnung für Herrn Dr. Sakisaka

1	Luxemburg Werke Bd. III	11.-
1	Kulischer Russ. Wirtschaftsgeschichte Bd. 1	24.-
1	Mayer Lassalle Bd. II	12.-
1	Meusel Erkenntnisse	5.50
1	Berlin Kapitalismus	15.-
1	Grundr. d. Sozialökon. III 1/2	36.-
1	Löwi Sozialismus sehr selt.	14.-
	4 Kreuzbänder Portot Emschr.	10.75
	Mk.	128.25

Archiv f. Sozialwissenschaft 53 III ist am ca. 29.4. Wirtschaftsdienstes 8. II von hier abgegangen. Vielleicht haben Sie sie inzwischen auf Umwegen erhalten. Wenn nicht, werde ich sie noch einmal bestellen.

1) シュトライザントの向坂逸郎への納品書
(1925 年)


31.5.29

HUGO STREISAND

BUCHHANDLUNG FÜR WISSENSCHAFT UND BIBLIOPHILIE

Berlin W 30 · Eislebener Straße 4

Fernsprecher 24 23 14

Antiquariatskatalog 220

Teil II

Wirtschaft · Handel · Nationalökonomie

Economica · Commerce · Finances

Économie · Commerce · Livres anciens et modernes

2) シュトライザント書店の書籍カタログ
(戦後の 1956 年)

3) シュトライザント書店のシール

(投稿)

経済資料協議会解散と日本における専門職人材育成の残された問題

渡　辺　志津子
(埼玉大学)

経済資料協議会（以降、“経資協”と記す）解散の年（2008）7月22日、厚生労働省が発表した『労働経済の分析』（以降、“白書”と記す）2008年版では、「高い意欲の発揮と職業能力開発に向けた適切な雇用管理」を今後の課題のまとめ3点の2点目として、皮肉にも挙げている。何を今更とあちらこちらの現場労働者が声にしていることと思う。筆者から見ると、国が警鐘を鳴らすのがあまりに遅かった。もう少し、国全体で今後の労働状況を先読みしていれば、“経資協”が本年、幕を閉じることもなかったであろう。

“経資協”の名を初めて耳にしたのは1980年代、図書館司書資格取得のための夏期講習受講時である。『経済学文献季報』はレファレンス・ブックについての説明時に、図書館学の教員が「日本では珍しい、とても便利なよくできた索引です。」と説明をしていたのを覚えている。後に司書の資格は取得したものの、しばらくは“白書”にも記されているとおり、不安定な身分（図書館業務委託会社社員、派遣会社社員、非常勤職員、アルバイトなど）で図書館員として過ごしていた。そんな折、どうにも図書館界の労働状況に納得できず、まさしく“白書”2008年版で記されているような問題点を明らかにすべく、社会人枠で勤めながら大学院に入りなおし、不安定雇用問題に取り組むようになった。その後、現勤務先の経済系資料室で助手公募があり、恩師の勧めもあって応募し採用された。

それまで、図書館員としての経験があったとはいえ、経済の専門的なレファレンスに回答出来るかどうかが、採用後も心配で仕様がな

かった。しかし、前任者（故宍戸素子氏）たちが築きあげておいてくれた“経資協”会員という立場で、半歩進んだ経済学に関わる研修などに多数参加させていただくことにより、少しずつブラッシュアップをしていくことができたのである。この「半歩」先というのが素晴らしいのだ。研修で耳や目にした内容は、いつも、実践の場で、少し遅れて大いに役に立つことばかりであった。こういった絶妙のバランス感覚は、充実した会員層によって執り行われていた“経資協”だからこそ企画できたことであろうと思う。経済学分野の専門職育成の、とっかかりとしての役割をも“経資協”は担っていた。筆者が、現職場への着任が出来ず、不安定就労のままであったなら“経資協”へも、決して所属できなかったことを考えると、日本中で行われている現在のような、専任スタッフを殆ど採用しないといった日本の図書館界では、“白書”の言う「高い生産力を担う」人材を育て上げるのは不可能に近い。

立場上、各種の図書館系団体に所属をしているが、“経資協”の際立った特徴のひとつとして、会員構成の多様性が挙げられる。国公私大、専門機関、民間団体、研究所、個人、教員、書店とあらゆる分野の会員、しかも年齢にも幅のある方々が「ごちゃごちゃ」と所属しているのが、実はスキルアップにとても役にたっていた。筆者はたった12年間の所属であったが、その間に培われた人脈や交流がきっかけで、法律図書館連絡協議会や、労働資料協議会にも加入させていただいている。多様性のある会員構成の人脈によって専門の幅がどんどん広がっていくのだ。

そんな“経資協”が、なぜ解散をせざるを得なかったか。雇用問題と共に、時代の変化の速さにうまくついていけず、専門職育成の政策立案にまで踏み込めなかったことも要因のひとつではないだろうか。『経済学文献季報』のワークシート作りは、原資料を手に取り、ページを捲り、唸りながら、キーワードや分類をつけるという、まさに格闘の場であった。スタッフが減り、仕事は時代と共に増えていっている中で、かなりの負担であったのは間違いない。編集を担当してくださっていた機関は、筆者所属機関が作る若干の枚数のシート作りの比ではない仕事の繁雑さであったと思われる。

国立国会図書館の雑誌記事索引が経済系の採録誌を増やしていき、“経資協”データとダブっているところは外すといった調整を行っているうちに、残念ではあるが採録は終了となった。しかし、今考えてみると、もっと先進的なことに取り組めたのではないかと思う。『経済資料協議会五十年史』（以降、“五十年史”）に片桐正俊氏が記しているように「フォーマットを統一してコンピューターに打ち込めば」を、更に発展させ、雑誌記事索引生データそのものへのキーワードや分類付与といったようなことを実践的に政策提言できたなら、他分野への多大な影響もあり専門職の確固たる地位と共に、世論をも味方にできたのではなかろうか。ご存じのとおり、現在の雑誌記事索引には、分類もキーワードも、国立国会図書館では付与していない。コンピュータ技術が発展して全文検索が出来るようになるのを待つが如くである。しかし、全文検索が出来たとしても、適切な件名やキーワード、分類付与が資料検索にどれだけ有効度が高いかは、日々のレファレンス業務を行っていれば感じるところが多いはずである。また、根岸正光氏ほかが行っている引用件数分析を参考にすると、経済学分野の、参考・引用文献リストを雑誌記事索引に絡ませていき、CiNii に反映させられることができれば、世界的にも要望が高いものであり可能性が見いだせたのではなかろうか。

そうは言っても国立国会図書館と国立情報学研究所という縦割りの組織編成の中で、国立国会図書館が取り組んでいる雑誌記事索引に、国立情報学研究所管轄の経済学文献索引データベースのノウハウを反映させることがどれだけ困難なことかは想像に違わない。“五十年史” p.58 の記述によると「国立国会図書館や「JOINT」作成グループと話し合いをしたが、それぞれの編集体制、編集方針などに多くの違いがあり、直接的な成果には結びついていない。」となっている。だが、これだけ図書館員が減ってきたにもかかわらず、専門性を要求される時代であるからこそ、長期展望の元、目新しいことにも、腰を落ち着けて取り組む必要があったはずである。どんなにコンピュータ化が進もうとも、最後は原資料を手に取らないことには理解度は進まない。それを何らかの型で強制的にでも行い続けることで専門性は身につき、血となり肉となるというのは身をもって強く感じている。逆を述

べるとこれらの作業をじっくり行える環境でなくては、専門職化は成り立たないであろう。

他に、問題となるのは、水田洋氏などがかかわっていた時代と学者たちのタイプが変わってきていることもある。川原和子氏を始め、教員たちとの切磋琢磨がその専門性をより高めていたことを考えると、多くの学者が文献に執着しなくなってきていることも“経資協”解散へと影響を及ぼしたものと思われる。

専門職の人材育成は、付け焼刃で出来るものではない。解散と“白書”の刊行が同じ年にあったのは、偶然ではないことを考えると次のステップに進むための解散と筆者は捉える。

1950年、西の神戸大学から声掛けが始まった経資協を、東の埼玉大学に所属する筆者は、よりよく存続させることができなかった。深く反省するとともに、図書館界における冬型気圧配置（西高東低）の深刻さを思わずには、いられない。この件に関しては、近いうちに発表することとする。

参考・引用資料

・『朝日新聞』「正社員減り生産性停滞」2008. 7. 22夕刊 p. 1

・川原さんを追悼する会編『女性司書の足あと—回想の川原和子』川原さんを追悼する会 2008

・経済資料協議会五十年史編集委員会編『経済資料協議会五十年史』経済資料協議会 2001

・厚生労働省『平成20年版　労働経済の分析＜要約＞－働く人の意識と雇用管理の動向』http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/08-2/index.html 2008. 6. 30アクセス

・根岸正光ほか「論文：わが国の大学における論文生産とその引用状況」『情報管理』Vol.43 No.7(2000.10)p.575-592

・渡辺斉志「公立図書館による政策立案の現代的意義—「図書館員」の消滅と再生」『現代の図書館』Vol.46 No.2(2008.6) p.138-144